

幼稚部保護者の方々より

「ボストン日本語学校幼稚部の運動会」

まだ9月だというのに、肌寒い曇り空の下、今年も幼稚部の運動会が開催された。今年からは年中と年長のみの運動会。新しい種目も増え、ベテラン保護者も目が釘付けだった今年の運動会。

話はズレるが、私は「頑張ること」が好きだ。それは「目標に向かって努力する姿は、キラキラ輝き・・・」等という素敵な理由ではない。私自身が「どうも人並みの結果を得るには、人一倍頑張らなければならないみたいだ」と、小学校3年の漢字のテストで気付いて以来「頑張ること」は私のドンくさい人生の支えとなっているからだ。

そこで、この運動会。私は親になって以来、涙腺が緩みまくりだが、今回のイベントも大いに私を感動させてくれた。ぶっつけ本番の「運動会」という名のイベントに、果敢にチャレンジする幼い子供達。笑顔を振りまく余裕すらあった。転んで泣いてしまってもゴールまでどり着く根性。子供には本当に驚かされる。また、御自身の子供は既に卒園している保護者の方々に構成されているPTA執行部。その方々が、当然の如く運動会の進行をサポートされていた。ボランティアの学生もいた。我々保護者も、大声で声援をおくったり、保護者参加の競技では子供以上に張り切ったり、カメラやビデオを撮ったり、早朝から見事なお弁当を作ったり、運動会のイメージに欠かせない、立派な脇役っぷりだった。そして、こうした日本の運動会を海外で生活する子供達に体験させて下さった、学校関係者の皆様。練習する時間もなく、恐らく家でイメージトレーニングをして本番に挑まれた先生方。ボストン日本語学校幼稚部の運動会は、頑張る力が溢れていた。私は大いに楽しみ、そして頑張る力を得た。ありがとう。



「日本語学校の友達」

日本語学校幼稚部の年少から通い始め、3年目の今年。年長になった我が子の社交性が高まり、クラスの友達との遊びに上手に参加できるようになったのを、とても嬉しい気持ちで観察している。

時は遡って10年程前——ボストン日本語学校作品集を手にする機会があり、幾人かの高校生の作文に心を打たれたことがある。そこには、日本語学校の友達と共にアイデンティティの確立を模索してきたティーンエイジャー達の、学校と友達への感謝の気持ちが綴られていたのだ。

「アメリカで生まれ育っていても、アジア系の顔をしているとステレオタイプに遭遇することがある。そんな時に自分の気持ちをわかってくれる友達がここにいて、本当に良かったと思う」という内容だったと思う。

そして一昨年前、PTA主催の第3回バイリンガル・セミナーで、講師の方が、アメリカで育つ日系人について、「日本語の団体に属す年数が多い子供、また日本人を含む人種的マイノリティと多くつきあいがある親をもつ子供ほど社会への適応度が高い」と話されていた。あの作品集の高校生達が述べていたことと、講師の方のお話とで重なる点が多かったことは、とても興味深かった。

以後、我が子にとってボストン日本語学校は、日本語や日本文化を学ぶ場所のみならず、大切な友達がいる「居場所」になるのかもしれない、そうなってくればいいなと考えている。



SNS 時代の子供達だから、学校を卒業してそれぞれ他の場所に移り住んでいっても、ネット上で繋がりを保ち続けることだろう。ここで仲良しになった友達が、それこそ一生の友達となる可能性も高い。

気の合う友達ができるということは、子供達の努力だけではなく、めぐり合いの縁や運も関係するので、過度の期待はいけないと思いつつ、仲良しの友達ができますように…と半ば祈るような気持ちで毎週登校している。